＜前回＞イエスと「神の国」運動

（１）近代聖書学における「神の国」論

１．キリスト教神学と同様に、聖書学においても、「イエス」は常に研究者の中心的な関心を占めてきた。→　歴史的イエスの探求、「神の国」「終末論」の問題。

２．「イエス研究／終末論」の変遷：「神の国」が常に議論の中心に位置してきた。

1) 19 世紀：近代聖書学の確立期、イエス伝研究、市民社会の倫理の教師イエス

2) 19 世紀末～ 20 世紀初頭：ヴァイス、シュヴァイツァー
　黙示的終末論の再発見→古代の黙示的終末論の宗教家イエス
　　「イエス伝研究」の挫折、ナザレのイエスと信仰のキリストとの分裂

3) 20 世紀聖書学のパラダイムの浸透：弁証法神学、モルトマンやパネンベルク
・このパラダイムの影響は聖書学あるいは神学にとどまらない。
・黙示的終末論か現在的終末論かという論争的枠組み。

4) 1980 年代以降：20 世紀聖書学のパラダイムの崩壊と新しいイエス探究（イエス・ルネサンス）。黙示的終末思想に基づく宗教者イエスという理解の相対化、知恵の教師イエス。

（２）神の国の宗教運動　→　隠喩としての「神の国」

３．新約聖書学　→　仮説・蓋然性における結論（伝承史を逆に辿る）
　　伝承史と二資料仮説
歴史的懐疑・歴史的批判的方法論の帰結
　イエスの伝記的事項については大まかなことしか言えない（福音書は伝記ではない）
　　→　イエスの教えについてかなりの蓋然性で言えること

４．イエスの福音
①「時は満ち、神の国は近付いた。悔い改めて福音を信じなさい」（マルコ 1:15）
②「子たちよ、神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」（マルコ 10:24b ～ 25）

５．「神の国」の宣教（新しい契約の実現）
　国（バシレイア）：神の制定した秩序（支配）　cf.国家機構、王国

６．神の秩序←→この世の秩序（古い秩序）＝罪（ハマルティア）
　　階層性・二分法・対立　的はずれ　cf:規則の侵害
　　関係の歪み（神関係、自己関係、他者関係）

７．「罪」＝「的外れ」＝「関係の歪み」（人間関係が歪んでしまっていること）
　人間存在（個人／社会）＝関係存在（神関係、自己関係、他者関係）

８．イエス時代のユダヤ社会・地中海世界（この世）：
典型的なしかも極端な不平等社会
　富める者／貧しい者、男／女、大人／子供、自由人／奴隷、ローマ市民／非ローマ人
　浄い人・義人／不浄な人・罪人

９．神の秩序の実現＝古い秩序の転換＝罪の解決＝救済　→　福音
　↓
　イエスの宗教運動：巡回・共同生活／論争・教え／奇跡行為（病の癒し）

10. 食卓としての「神の国」。

11. 開かれた共食における神の国（クロッサン）：イエスの宗教運動において現実化しつつあった「神の国」は、イエス運動の食卓を見る限り、罪人と食事を共にするというあり方として確認できる。階層的な社会秩序と関係の歪みに対する徹底的な平等主義である。

12. 平等な開かれた食卓としての救い：
　人間としての自己肯定可能な共同体内に自分の居場所を見出すこと＝意味の回復

断片的実現と未完成な全体、神の国は生成途上にある。

13. イエス時代の通常の「神の国」理解：預言者的終末論、黙示的終末論
↓
イエス運動における「神の国」の意味の転換＝隠喩化
善人が入ることができる神の国　→　罪人が招かれる神の国

14. 知恵の教師イエス：慣習的知恵（既存の秩序肯定）、転換的知恵（既存の秩序転換）

15. 知恵から終末論へ：人間性の回復される現実をもたらす知恵
終末論のあるべき位置とは？

16. 理念と現実の緊張・対立（ずれ）　→　キリスト教の動的展開
「神の国は近づいた」、未だ生成途上にある。

17. 宇宙論的問題設定、宇宙的キリスト、あるいは拡張された神の家族の射程
時間と言語

18. エコロジー神学にとっての「神の国」・終末論

19. クロッサンの方法論（『イエスとは誰か――史的イエスに関する疑問に答える』新教出版社、2013 年。）三機のサーチライト　→　医療人類学

３．病の癒やし・譬え・共同生活

（1）イエスの奇跡物語（治療奇跡）

１．聖書学的に奇跡物語をどのように解釈するか
奇跡テキストはいかに読まれるべきか　→　ふさわしい問いとは
cf. ブルトマン

２．「悪霊に取りつかれたゲラサ人をいやす」（マルコ 5.1-20）

5:1 一行は、湖の向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。2 イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた霊に取りつかれた人が墓場からやって来た。3 この人は墓場を住まいとしており、もはやだれも、鎖を用いてさえつなぎとめておくことはできなかった。4 これまでにも度々足枷や鎖で縛られたが、鎖は引きちぎり足枷は砕いてしまい、だれも彼を縛っておくことはできなかったのである。5 彼は昼も夜も墓場や山で叫んだり、石で自分を打ちたたいたりしていた。6 イエスを遠くから見ると、走り寄ってひれ伏し、7 大声で叫んだ。「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。後生だから、苦しめないでほしい。」8 イエスが、「汚れた霊、この人から出て行け」と言われたからである。9 そこで、イエスが、「名は何というのか」とお尋ねになると、「名はレギオン。大勢だから」と言った。10 そして、自分たちをこの地方から追い出さないようにと、イエスにしきりに願った。11 ところで、その辺りの山で豚の大群がえさをあさっていた。12 汚れた霊どもはイエスに、「豚の中に送り込み、乗り移らせてくれ」と願った。13 イエスがお許しになったので、汚れた霊どもは出て、豚の中に入った。すると、二千匹ほどの豚の群れが崖を下って湖になだれ込み、湖の中で次々とおぼれ死んだ。14 豚飼いたちは逃げ出し、町や村にこのことを知らせた。人々は何が起こったのかと見に来た。15 彼らはイエスのところに来ると、レギオンに取りつかれていた人が服を着、正気になって座っているのを見て、恐ろしくなった。16 成り行きを見ていた人たちは、悪霊に取りつかれた人の身に起こったことと豚のことを人々に語った。17 そこで、人々はイエスにその地方から出て行ってもらいたいと言いだした。18 イエスが舟に乗られると、悪霊に取りつかれていた人が、一緒に行きたいと願った。19 イエスはそれを許さないで、こう言われた。「自分の家に帰りなさい。そして身内の人に、主があなたを憐れみ、あなたにしてくださったことをことごとく知らせなさい。」

20 その人は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことをことごとくデカポリス地方に言い広め始めた。人々は皆驚いた。

３．新約聖書学の代表的議論から：荒井献

・奇跡物語の最古層、帰還命令

→ 「癒やし」とは何か、その社会的次元。癒やしとは病によって壊れた人間関係が回復されることにおいて完結する。

４．ポイント → 医療人類学を参照する。

・疾病（disease）：身体的、心的。基本的に特定の次元に限定。治療。
病（illness）：精神的・宗教的を含む全人格的態度、複数の次元が複合的に関与する。

・奇跡は物理的現実である前に社会的現実である。奇跡の癒やしは家族への帰還で完成。
癒しの社会的次元：関係性の回復という奇跡
和解のない世界、「にもかかわらず」
治療がなされなくても癒やしが起こることはあり得る。

・しかし、これは、驚くべき出来事＝恩恵・贈与＝神の国

５．イエスの宗教運動は、「神の国」を共同体レベルでわかち合うものであった。これは、病の癒やしを伴っていた。

（２）実例２

６．「五千人に食べ物を与える」（ヨハネ 6.1-15）
（並行記事：マタイ 4.13-21、マルコ 6.30-44、ルカ 9.10-17）

1 その後、イエスはガリラヤ湖、すなわちティベリアス湖の向こう岸に渡られた。2 大勢の群衆が後を追った。イエスが病人たちになさったしるしを見たからである。3 イエスは山に登り、弟子たちと一緒にそこにお座りになった。4 ユダヤ人の祭りである過越祭が近づいていた。5 イエスは目を上げ、大勢の群衆が御自分の方へ来るのを見て、フィリポに、「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」と言われたが、6 こう言ったのはフィリポを試みるためであって、御自分では何をしようとしているか知っておられたのである。7 フィリポは、「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」と答えた。8 弟子の一人で、シモン・ペトロの兄弟アンデレが、イエスに言った。9 「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう。」10 イエスは、「人々を座らせなさい」と言われた。そこには草がたくさん生えていた。男たちはそこに座ったが、その数はおよそ五千人であった。11 さて、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた。12 人々が満腹したとき、イエスは弟子たちに、「少しも無駄にならないように、残ったパンの屑を集めなさい」と言われた。13 集めると、人々が五つの大麦パンを食べて、なお残ったパンの屑で、十二の籠がいっぱいになった。14 そこで、人々はイエスのなさったしるしを見て、「まさにこの人こそ、世に来られる預言者である」と言った。15 イエスは、人々が来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、ひとりでまた山に退かれた。」

７．食糧携帯を当時の一般的な旅の仕方。自分（たち）が食べるため。

食べ物の提供を一人の少年が率先して行ったときに、人々（大人たち）がそれに倣って食べ物の分かち合いを行ったとすれば、それは奇跡であるが、そこに「神の国」が経験

された、と言えないか。

（３）旅と神の国

８．癒やしの実践と移動式「神の国」運動。

定住（新宗教によく見られるパターン。治癒能力者を核とした組織化）ではなく、移動。

1:29 すぐに、一行は会堂を出て、シモンとアンデレの家に行った。ヤコブとヨハネも一緒であった。30 シモンのしゅうとめが熱を出して寝ていたので、人々は早速、彼女のことをイエスに話した。31 イエスがそばに行き、手を取って起こされると、熱は去り、彼女は一同をもてなした。32 夕方になって日が沈むと、人々は、病人や悪霊に取りつかれた者を皆、イエスのもとに連れて来た。33 町中の人が、戸口に集まった。34 イエスは、いろいろな病気にかかっている大勢の人たちをいやし、また、多くの悪霊を追い出して、悪霊にものを言うことをお許しにならなかった。悪霊はイエスを知っていたからである。

35 朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、人里離れた所へ出て行き、そこで祈っておられた。36 シモンとその仲間はイエスの後を追い、37 見つけると、「みんなが捜しています」と言った。38 イエスは言われた。「近くのほかの町や村へ行こう。そこでも、わたしは宣教する。そのためにわたしは出て来たのである。」39 そして、ガリラヤ中の会堂に行き、宣教し、悪霊を追い出された。（マルコ）

９.「家族が放浪するイエスに手を焼いたのは、家族がイエスをナザレの実家に居座らせてそこを癒しの儀礼の場にしたかったからでしょう。彼は親分になる、家族は斡旋人（ブローカー）んある、農民に噂が広まれば病人は子分として癒やしてもらいに来る。それで皆が得をするはずだ。」（クロッサン、『イエスとは誰か』、105 頁）

10. 「神の国」はブローカーの斡旋によるものではなく、向こうの方からすべての人のところにやってくる（「神の国は近づいた」）。

11. 神学と旅との本質的関わり。フィリピ 3.13-14。旅は、「神の国」の現実に即応する。

＜参考文献＞

１．Marcus J. Borg, *Jesus in Contemporary Scholarship*, Trinity Press International, 1994.
（『イエス・ルネサンス』教文館 。）
, Conflicht, Holiness and Politics in the Teaching of Jesus, Trinity Press, 1984.
２．John Dominic Crossan, *The Historical Jesus. The Life of a Mediterranean Jewish Peasant,*
,Jesus. A Revolutionary Biography, HarperSanFrancisco, 1995.
『イエス あるユダヤ人貧農の革命的生涯』新教出版社。
『イエスとは誰か――史的イエスに関する疑問に答える』新教出版社。
３．荒井献　『イエスとその時代』岩波新書
『問いかけるイエス　福音書をどう読み解くか』NHK 出版。
「第一五講　「自分の家に帰りなさい」
４．田川建三　『イエスという男』三一書房。
５．波平恵美子『医療人類学入門』朝日選書。
６．浅野淳博ほか『新約聖書解釈の手引き』日本キリスト教団出版局。
７．Ｎ・Ｔ・ライト『新約聖書と神の民　上巻　キリスト教の起源と神の問題１』
新教出版社。